

巻 頭 言

全国的に猛威を振るったインフルエンザもようやく落ちついたかと思うと、大阪での麻疹の流行が気になる年度末となりました。そして、30年続いた平成が終わり新たな時代を迎えようとしています。



加古川中央市民病院が開院し2年8か月が経ちました。昨年度は、改めて「質」にこだわり、医療技術、医療安全、患者・職員満足度、そして経営の4つの視点で医療の質の向上に取り組みました。診療面では、3名の乳腺専門医師を迎え乳腺外科を開設し、2名の病理医の着任によりがん診療の充実が図れました。脳血管内カテーテル治療、経カテーテル的大動脈弁置換術、先天性心疾患手術もいずれも安全に実施できおり症例も増えてきています。また、新たに肥満症治療チームを結成し肥満外科手術も始まったところです。小児科領域では呼吸器管理などを要する重症患者さんの在宅医療への移行が難しいといった課題解決のため在宅医療支援室を創設しました。在宅療養についての相談ばかりでなく、退院後の一定期間の在宅訪問による支援を開始しました。スムーズな在宅療養へむけての支援はご家族に非常に喜ばれています。また、新専門医制度が始まり、専攻医も指導医もJ-OSLERによる評価に戸惑いながらも1年間の専門研修を終えようとしています。管理面ではコンプライアンス推進部門や審査室を創設し、臨床研究法の開始に合わせて臨床研究・治験センターの組織を充実させました。いずれも医療の質向上へ向けての取り組みですが、これら様々な取り組みの結果、日本医療機能評価機構の病院機能評価（3rd G:Ver. 2.0）でも4項目のS評価をいただき認定を受けることができました。

少子高齢化社会、多死社会にむけて看取りの議論や地域包括ケアシステムの構築への取り組みが行われています。地域医療構想に向けた地域での調整会議もアドバイザーの意見も参考にして始まっています。一方、2024年より適用される医師の時間外労働規制や労働時間の短縮策など医師の働き方改革についての議論が積み重ねられています。目まぐるしい環境の変化の中、診療機能の一層の充実を図り、地域住民の健康を支えるべく、職員一丸となって取り組んでまいります。宜しく、ご指導ご鞭撻の程お願い申し上げます。

加古川市民病院機構学術誌第8号には、2017年度の病院の概要並びに職員の論文や学会発表などの研究業績が盛り込まれています。ご覧いただき忌憚のないご意見を頂ければ幸いです。最後に、本誌の取り纏めにご尽力頂いた編集委員や職員の方々に深謝申し上げます。

2019年3月

加古川市民病院機構
加古川中央市民病院

理事長
院長
大西 祥 男